高崎経済大学論集　第66巻　第３号　2023　167 ～ 195頁

「女の子なのにボーイスカウトなの？」
日本スカウト運動史における女子の受け入れプロセス

横　山　　陸

はじめに

本論文では、日本のボーイスカウト運動における女子の受け入れがいかにして達成されたのかを検討する。

ボーイスカウト運動およびガールガイド（ガールスカウト）運動は、20世紀初頭の英国においてロバート・ベーデン＝パウエル（1857-1941）によって考案され、世界中に広まっていった青少年教育運動[1]である。両運動は男女別の運動として組織され、教育の対象としてはジェンダーに基づく分離が長らく維持されてきた。しかしながら、世界スカウト機構（WOSM）は1977年にスカウティングを「性（gender）の区別のない『青少年』のための運動」（WOSM 1999=2001: 3）として定義し、世界各国で「共学化」が進んでいくこととなった。日本においても、戦後学校教育において男女共学が標準とされて以降も、長らく男女別団体として展開されてきたが、1995年にボーイスカウト日本連盟が全部門における女子加入を認めたことで、以降急速に女子の受け入れが進んだ。

スカウト運動／ガイド運動についてジェンダーの観点から言及した研究は、主に欧米のジェンダー史分野を中心にいくつも存在しており、例えばジョージ・モッセは、19世紀を通じて最も進められた「新しい支配エリートを準備するものとしての男らしさの教育」の例として、パブリック・スクールに次ぐものの筆頭にスカウト運動を挙げている（Mosse 1996=2005: 205-8）。またトーマス・キューネは、第一次世界大戦前後に「女性化」「軟弱化」に対する危機感から、男の子を「真」の男にするスカウト運動に人びとが殺到したことを記述している（Kühne ed. 1996=1997: 17-8）。スカウト運動における女子受け入れについても、サラ・ミルズが、英国を事例にそのプロセスを分析している（Mills 2011）。

ひるがえって日本におけるスカウト／ガイド運動については、田中治彦らによる少年団運動史にかんするもの（田中 1995; 上平・田中・中島 1996; 田中 1999; 田中 2015）、ガールスカウトの前身である女子補導団史にかんするもの（矢口 2008）、活動の場を海上に特化した少年団運動である海洋少年団（シースカウト）にかんするもの（圓入 2011）などがある。しかしながらこれらはジェンダーの観点から検討がなされたものではなく、

1　ここで「青少年教育」とは、子ども・若者に関わる社会教育（学校教育以外）分野での活動・政策の総称を指す（田中 2015: 1）。

またおおむね戦前～戦後再編期までを対象とした歴史研究であるために、本論文が焦点化する女子加入の時期はそもそも射程外となっている。

他方で日本の社会教育研究においては、正史としての社会教育史におけるジェンダー・バイアスの問題が指摘される一方で、これを克服すべく後発的に取り組まれてきた「婦人教育史」研究が特論扱いされてきたこともまた指摘されており、両者を統合した「女性の社会教育に関わる史実や視点を正当に位置づけた社会教育史研究」（中藤 2001: 76）が課題とされている。そのために「女性問題と男性問題の統合」（佐藤 2001: 74-3）の必要性が主張されてはいるものの、ジェンダー視点を導入した社会教育研究は今なお「女性（婦人）問題学習」への着目が主であり、スカウト運動のような男性を対象とした教育実践をジェンダー視点から検討したものはほとんど見られない。

より広く「ジェンダーと教育」研究一般においては、戦前の男女別学を標準としていた学校教育が、戦後男女共学を標準とした体制へと移行し、それが多様なかたちで受容されていく過程にかんする研究が展開されている（小山 2009; 小山編 2015; 小山・石岡編 2021; ほか）。しかしこうした研究群はフォーマルな学校教育への関心が主であり、その外側におけるノン・フォーマルな教育実践への関心は希薄である。

上述してきた研究状況を踏まえ、本論文ではまず先行研究に依拠しながら、スカウト運動およびガイド運動が男女別の運動として成立した経緯と、それが日本に伝播した経緯を簡単に確認する（Ⅰ）。次に、戦後男女別の運動として再始動したスカウト運動の草の根レベルにおいて展開されていた「コ・エデュケーション（共学）」の実践について検討を行う（Ⅱ）。最後に1990年代にボーイスカウト日本連盟が女子の受け入れに至る経緯を分析する（Ⅲ）。以上の作業を通じて、学校教育の外側における「戦後教育のジェンダー秩序」（小山 2009）を解明するための一助としたい。

Ⅰ　スカウト／ガイド運動の成立

1．男女別団体としての始動

20世紀の青少年運動の原型とされるスカウト／ガイド運動は、ロバート・ベーデン＝パウエル（以下B-Pと略記）によって提唱された。名門私学のチャーターハウス校を卒業、英国陸軍に仕官したB-Pは、ボーア戦争に際して南アフリカのマフェキングに総司令官として赴き、217日におよぶ籠城戦に勝利したことで「マフェキングの英雄」として本土でも一躍有名になったという。この際に見習兵団として組織した現地の少年の活躍ぶりに感銘を受けたことが、後のスカウト運動構想のきっかけになったとされている（田中 2015: 26-7）。

スカウト運動が生まれた20世紀転換期のイギリスは、ボーア戦争における予想外の苦戦や、階級分化と下層民の貧窮化といった状況ゆえに、「民族の衰退」「国家の効率性」といった言葉がキーワードになるなど、革命あるいは崩壊の危機が予感され、教育の普

及と下層民の保護を通じた国民国家の確立が目指されていた（田中 1995: 25-6）。とりわけ、ボーア戦争で志願してくる若者が兵士としての使役に耐えうる「男らしい」身体を持っていないことが問題視されており、1903年にボーア戦争から帰国したB-Pはこの「男らしさの危機」（Kühne ed. 1996=1997: 17-8）の中でスカウト運動を構想したという。つまり、スカウト運動のモチベーションは、大英帝国の将来が「怠惰」で「不健康」な次世代の男たちの手に委ねられることへの恐れに大きく起因していたのである（Mills 2011: 541）。

1907年に50歳を迎えたB-Pは、退役後の人生を新しい青少年団体の設立に投じる決心を固め、同年夏にイングランド南部の小島・ブラウンシー島にて、労働者階級の子弟からパブリック・スクールに通う中流階級の子弟までを集め、実験キャンプを行った。これは「最初のスカウトキャンプ（The first Scout camp）」と呼ばれるものであり、その成果をもとに出版された『スカウティング・フォア・ボーイズ』（1908年）がベストセラーになったことで、雨後の筍のように各地にスカウト組織が叢生していった。当初は各地の篤志家や青年たちによる自発的な組織であったものの、実験キャンプから２年後の1909年に開催されたスカウトラリー参加者は１万１千人を数え、翌1910年には会員数が12万人を超える勢いであったため、B-Pは運営委員会と諮問委員会を設置し、以後ボーイスカウト運動の法人化を進めていくことになる（田中 1995: 33-52; 2015: 27-8）。

こうした熱狂に巻き込まれていったのは男子たちだけではなく、1908年の英国にはスカウティングを始めた女子たちが一定数いたという。黎明期のスカウト運動においては、把握しきれていないだけで、実際にはそれ以前からスカウト運動を自主的に始めた少女は数多く、またB-Pもそれを感知していたという。B-P自身は、女子も立派で役に立つスカウトになることが出来ると述べ、「私は女の子の隊が作られていると耳にするために、常にうれしく思っています」「女の子がスカウト技術（scoutcraft）を学んではならない理由はまったくありません」と公言していたという（Mills 2011: 543）。

しかしながら、保護者や政治家は「おてんば娘（tomboys）」の語を用いてこれを激しく批難し、それを受けて本部は登録手順によって女子を排除するようになっていく（田中 2015: 33; Mills 2011: 544）。先述した1909年９月のスカウトラリー以後、「女子スカウト」に関する論争は最高潮に達したが、同年11月に「少女の場合には、まったく異なった方法で運営されなくてはならない」として、新しい少女の組織としてのガールガイドの構想が発表されたことによって終止符が打たれた（矢口 2008: 32-3）。ガイド運動の目的は「すべての少女により良き母になり、次世代をガイドする力量を身につけさせること」であり、ガイド運動では方法論などは概ねスカウト運動のそれを踏襲していたものの、班名に花の名が用いられるなど、女らしさや母性が強調されていた（矢口 2008: 33-5）。黎明期において女子はスカウトとは違った料理や看護と言った「女性的な」活動を行うべきと考えられていたことから、黎明期にはキャンプの位置づけも不明瞭であり、1913年には中央委員会がアウトドアのキャンプをすべきではないとの宣言まで出し

ている（矢口 2008: 36）。

かくして男女別団体として始動したスカウト／ガイド運動は、1914年に勃発した第一次世界大戦を契機として国際的青少年団体として路線転換を遂げる。戦時下においてスカウトたちは後方支援・銃後活動に従事し、また積極的に志願兵として前線へと赴くなど、戦時下での活躍が注目され、スカウト運動の社会的評価は一段と向上していくことになった（田中 2015: 36）。ガイドたちもまた、病院などの施設で働き、その活動と存在が注目を集めたことで、初期ガイド運動が抱かれていた反感を一掃し、組織としても急速な発展をしていくこととなる（矢口 2008: 37-40）。しかし、第一次世界大戦も終盤を過ぎると、社会に厭戦気分が蔓延し、反戦平和主義の世論が台頭してきたことで、運動の内外から軍事訓練批判が頭をもたげてくるようになる。こうした状況を受けて、大英帝国防衛を目的に構想されたスカウト運動は、戦後それまでの国家主義・保守主義の立場から国際主義・中道主義へと路線転換を図り、方法論の面でもそれまで頻繁に行われていた教練（drill）の要素を削減し、平和的な野外活動（ウッドクラフト）に重点を移すなど、国際的青少年団体として再スタートを切った。1924年に採択されたコペンハーゲン宣言では、ボーイスカウトは国家的・国際的・普遍的であり、軍隊の性格を持たないこと、またいかなる宗教の上にも成り立つ宗教普遍的なものであること等が謳われている（田中 2015: 38）。またガイド運動でもほぼ同時期の1919年に国際的組織が作られたほか、スカウト運動で採択されたコペンハーゲン宣言を受け、ガイド運動でも同様な対応を行うこととなった（矢口 2008: 41）。

2. 日本への伝播と解体／再編

このようにして成立したスカウト運動が日本に伝播したのは、1908年のこととされる。当時の日本は日露戦争を戦っていた時期であり、イギリス同様に「来るべき戦争に備えるために青少年を訓練しなければならない」という課題に直面していた。そうした背景もあり、スカウト運動が英国全土を席巻していくと、当時欧州に滞在していた日本人などを通じてこの運動は日本にも伝わっていき、日本全国各地に実に多種多様な青少年団体が独自の名称で叢生していくこととなる。1922年には少年団日本連盟が結成され、1925年の時点で加盟団体数425、団員数は６万人を数えるまでに組織は成長していく（田中 1995: 112）。とはいえ戦前の少年団運動は「玉石混淆」であり、英国のボーイスカウト路線を取る団と従来の子ども会や独自の日本式訓練を行う団とが入り混じっていたという（上平・田中・中島 1996: 317）。

なお、少年団日本連盟は「スカウト」の訳語として「健児」という語を用い、「健児教育」を掲げているが（上平・田中・中島 1996: 163）、これは方法論としてのイギリスのスカウティング理論に、倫理的支柱として日本固有の精神的伝統とみなされた皇国思想や武士道精神を融合させたものであるという（上平・田中・中島 1996: 173）。日露戦争期からさかんに鼓舞されるようになる「青年」というカテゴリーは、日本将来の「開

拓の使命」に耐えうる、精力旺盛で競争を勝ち抜くことができる「剛健不屈」な男性像であるが（加藤 2014: 108-10）、少年団運動が掲げた「健児」という訳語もまた、同様の男らしさの要請を反映していると言えるだろう。

日本国内に英国同様のニーズがあり、紹介されるのが比較的早かったスカウト運動に対して、日本にガイド運動が紹介されたのはやや遅く1920年のことであった。ガイド運動は欧米から派遣されたキリスト教宣教師によって持ち込まれ、キリスト教主義に基づく日本聖公会系の女学校、教会、幼稚園を中心に、教育と伝道という二つの役割を果たしていくための手段として「女子補導会」「補導団」といった名称で展開されていく（矢口 2008: 71）。当初の位置づけは英国ガールガイド連盟の日本支部というものであり、活動は東京を中心とした極めて狭い範囲に限られたという。女子補導団運動は第一次世界大戦を経て変化しつつあった女性像を反映し、かつ大正期に登場した都市部新中間層を主たる対象としており、将来の家庭人養成のための女子教育の重視、新教育と児童中心主義の立場といった女子教育観は、戦後の家庭像と女子教育を先取りしたものと評価できる（矢口 2008: 404）。

こうして1920年代に組織化を果たした両運動であったが、第二次世界大戦が開戦すると、枢軸国ドイツのヒトラー・ユーゲントに倣った「大日本青少年団」が文部省社会教育局の試案にもとづき結成され、1941年に日本の青少年団体はここに統合されてしまう。これは戦前の少年団運動の実質的な解散を意味するものであった（田中 1995: 142-3）。これに対し、女子補導団では満州事変以後、活動が急速に停滞し、機関誌『女子補導団』の発行も1934年を最後に停止している（矢口 2008: 166）。戦時色が濃くなっていく中で、女子補導団は大日本青少年団などの他団体に合流することもなく、1942年 1 月をもって自主的に解散した（田中 1995: 118; 矢口 2008: 167）。

戦時体制下で一旦は絶えてしまった両運動の灯であるが、終戦後すぐに戦前の少年団関係者らによる運動再建の動きが起こる。当初GHQは大日本青少年団の組織と活動を日本の軍国主義の最大の温床と考えていたため、ボーイスカウトの再建運動を許可しなかったが、GHQ内部のスカウト出身者らの助力もあり、アメリカのボーイスカウトを手本に再編成が進められていくことになる（上平・田中・中島 1996: 303）。1946年末には「ボーイスカウトの再編成についての指示」が出され、1949年 4 月に財団法人ボーイスカウト日本連盟が発足、1950年には世界連盟への復帰を実現させ、今日に至っている（上平・田中・中島 1996: 304-9）。

おおむね時期に、女子補導団運動も再編される運びとなる。戦前の補導団は、規模の小さい活動であり軍部との繋がりが希薄であったことから、民主的青年教育のモデルとして、ボーイスカウト以上に注目された（矢口 2008: 336）。戦前はイギリスのガイド連盟からの影響の強かった女子補導団であるが、戦後はボーイスカウト同様にアメリカの

ガールスカウト連盟の影響を強く受け[2]、ガールスカウトという名称で展開していくことになる。1949年４月には全国組織としてガールスカウト日本連盟が正式に発足し、その後1952年に世界連盟の準加盟国に、1959年には正加盟国として認可されている（矢口 2008: 360）。なお、戦後教育改革の中で、社会教育においても学校教育と同様に男女機会均等の原則が進められ、戦前の特性教育に連なるとして母親学級などの「婦人教育」は禁止されたが、女子青年団体であるガールスカウトは例外的に推奨されている。これは「婦人教育」に対して文部省およびGHQ内部にも多様な立場があり、「参政権、教育機会を含む社会的権利を剥奪されてきた女性に対して、その権利を実質化するための教育機会を設けようとする立場」があったためである（矢口 2008: 406）。そこでは男性の指導を排した女性のみの活動・運営とすることにより、女性の自主性の涵養と地位向上が期待されたのである。

3. 女子の受け入れへ

以上の経緯によって、少年団／女子補導団運動はボーイスカウト／ガールスカウトとして再編され、戦後学校教育が男女共学を原則とする中で、男女別の団体として再出発を遂げることとなる。

しかしながら、ボーイスカウト運動については、それ以降徐々に女子・女性が参加していくことになる。表１は日本のボーイスカウト運動における女子・女性の参加の流れを大まかに整理したものである。

表1　ボーイスカウト運動への女子加入の流れ（『スカウティング』1995.7: 22-3より作成）

	スカウト	成人（指導者など）
1962年		当時の最年少部門であるカブ部門の指導者に女子の加入を認める
1986年		ビーバー部門新設、指導者に女子の加入を認める
1989年		ボーイ部門指導者、団委員・各コミッショナーへの女子加入を認める
1990年	ローバー部門に女子の加入が認められる	ローバー部門指導者に女子の加入が認められる（シニアー部門指導者以外のほぼ全ての領域への女子加入が認められる）
1995年	全部門への女子の加入が承認、以後段階的に実施（＝全部門の共学化）	

最初に女性が加入を認められた領域は、当時の最年少部門であったカブスカウト部門（小学校低学年～高学年）の指導者であり、1962年のことである。年少部門の指導者へ

2　アメリカにおいては1912年に「ガールスカウト」の名称で運動が始まっているが、「ガールガイド」から「ガールスカウト」に名称変更が行われた理由は、アメリカ英語において「guide」という語に「インディアンを狩る人」という含意があったからだとされている（ガールスカウト日本連盟 2010: 31）。

の女性参加は英国においても早期から認められており、これはいわば母親役割を期待されてのものであると理解できる。1986年にはカブ部門の下に、新規にビーバースカウト部門（就学前～小学校低学年）が開設され、カブ部門同様に指導者としての女性加入が承認されている。その後1989年には、ボーイスカウト部門（小学校高学年～中学校）の指導者、および団委員・コミッショナーといったマネジメント役への女性加入が認められ、女性がコミットすることができる領域が大きく拡大される。

他方で、教育の対象であるスカウトに女子を含めることが初めて議論されたのは、ビーバー部門が新設された前後の、1980年代中盤になってからであった。そして1990年には、他部門に先駆けて、最年長部門であるローバースカウト部門（大学生年代～ 20代）への女子スカウト加入が認められた。最終的には1995年度の年次全国会議で全部門への女子加入を認めることが可決され、同年 9 月のビーバー部門を皮切りに、以後段階的に女子受け入れが実施されていくこととなる。

以下では、戦後のスカウト運動が教育の対象として女子を受け入れるに至る過程をより仔細に検討していく。

Ⅱ　大学ローバーによる女子受け入れ実践

前節で確認したとおり、日本連盟において教育対象としての女子受け入れが承認されたのは1990年代に入ってからのことである。しかしながら、実際にはそれよりも前から、インフォーマルな草の根の実践として女子を入れての活動の実例が存在していた。本節では、そうした実践の一例として、大学ローバーにおける1960 ～ 80年代の「コ･エデュケーション」の実践を取り上げる。

大学ローバーとは、日本の大学の部活動またはサークルとしてのローバースカウト活動を指し、ボーイスカウト日本連盟にもローバースカウト隊だけを有する団として登録されている[3]。自治を原則とするローバー活動の中でも特に独立運営的な気概が強く、パターナリスティックな介入を行おうとする日本連盟・東京連盟との間でのトラブルも多かったようである。本節において資料として用いるのは、慶應、早稲田、同志社の大学ローバーの実践を振り返った1997年のシンポジウム記録（スカウティング研究センター編 1998）およびそこに所収されている資料群である[4]。以下ではそれぞれの大学における議論や実践を整理しつつ、女子受け入れの論理について検討していく。

3　ここでスカウト運動の組織構造を概説しておくと、大まかには班 - 隊 - 団 - 地区 - 都道府県連盟 - 日本連盟といったツリー状の組織構造となっている。運営の基礎単位となるのは「団」であり、複数の「隊」および団委員をはじめとするマネジメント役から成っている。「隊」は活動の基礎単位であり、スカウト年代ごと（ビーバー、カブ、ボーイ、ベンチャー、ローバー）に分かれている。「隊」は複数の「班」および成人指導者から成っている。団は「地区」「都道府県連盟」「日本連盟」に所属しており、各階層にはコミッショナーと呼ばれる役職が配置されている。

4　以下本節では同資料からの引用はページ数のみを記す。また引用文中の［…］は中略を表し、引用者による補足は［　］内に記す。

1．早稲田大学ローバースの実践

1958年に結成された早稲田大学ローバースは、「コ・エデュケーション」と称して女子を含めての活動を展開しており、それは「活動の先駆性」「活動・組織・原理への問題提起性」があるものとして位置付けられている（p. 50）。シンポジウムにおいて登壇したOBの中島豊は、大学ローバーをそうした先駆的な実践を行うための「実験場」（p. 50）として位置づけている一方で、そうした実践は上層部からたびたびクレームを付けられていたことを述べている。

> 組織的に見れば女子との活動です。私たちはコ・エデュケーションという言い方をしているんです。この言い方は同志社が言っていたんです。女の子と一緒にやる［…］そこらへんが［東京］連盟からすれば面白くない、クレームがついたということですね。［…］
> そういった意味では、活動の先駆性があったんではないか。１歩先に進んで出ちゃったから、色々叩かれたりしたんでしょう（p. 18）

なお、ここで中島は当時の実践内容の詳細については言及していないが、シンポジウムの中で他の登壇者から「早稲田はあの時は団委員で登録をされて」（p. 24）という発言があることから、女子部員は正規のスカウトとしてではなく、団委員などのかたちで日本連盟に加盟登録していたと考えられる。

このように、学校教育において男女共学が標準となっていたはずの時期においても、スカウト運動における女子を入れての活動は先駆的なものとして理解されており、連盟から問題視される性質の実践であったことが読み取れる。

2．慶應義塾大学スカウトクラブの実践

1957年に結成された慶應義塾大学スカウトクラブは、結成５年目に当たる1962年にローバー隊とガールスカウト東京第２団のレンジャー隊と合同して慶應義塾大学文連にサークルとして加盟、以後男女合同での活動を続けてきた。ボーイスカウトの隊とガールスカウトの隊が合同している、というのがこの事例の特徴であり、すなわちここでは本来であれば別の運動である（ボーイ）スカウト運動とガイド運動とが、大学のサークルとして同一の組織を構成している。

しかし、この組織のかたちをめぐっては、サークル内部でも意見の対立があり、「女子を入れての活動」を現代社会において「ごく自然」で「当たり前」の「現実的」なものであるとみなす立場の一方で、女子を入れた活動はローバー活動の「主流や主体」ではないとみなす立場も存在していたと、慶應ローバー OBの田辺健一郎は述べる。

> スカウトクラブという名称についても、現在に至るまでローバー隊なのかクラブ（サークル）なのかという論争がずっとありました。今はだいぶ少なくなったんですが、女子を入れての活動は

ローバーリングの主流や主体ではないと考えられている先輩や一部のそういう方々がいます。それから社会人として巣立っていく前の大学生として我々は女子を受け入れて活動するのはごく自然、当たり前の話ではないかという現実的な流れとしてのスカウトクラブ的な活動とがあります（p. 11）

つまり、男女別の活動こそが本来的なローバー活動の在り方であるが、現代社会においては男女合同での「サークル的な活動」はより現実的な活動の形態であり、本来的なローバー活動が必ずしも現実に符合していない、ということが自覚されているのである。そしてそれらは相反する理念であるとして見なされており、そのどちらに重点が置かれるかは、その時代ごとのメンバーの考え方によって流動的であったとも述べられている（p. 11）。

このように、女子を入れての活動を本来のローバー活動の理念とは相容れないものとする理解は、先に挙げた早稲田の実践が上層部の反発を招いた要因として理解できるだろう。女子受け入れをめぐるディレンマは、次の同志社の事例においてはより鮮明に語られている。

3. 同志社大学スカウト同好会の実践

同志社大学スカウト同好会は、1961年に創設された。当初はローバー隊と同時にガールスカウトのレンジャー隊も出来るが、レンジャーは４年後解散し、その後８年間は男子だけの活動となった。しかし1973年に女子の受け入れを開始、同志社大と同志社女子大の学生を受け入れるようになる（p. 20）。1973年当時の年間活動方針を示した資料の中の「女子部員のクラブ参加について」という項では、この女子を受け入れた活動のあり方について、以下のように述べられている。

今、ヨーロッパにあっては、Co-educationの活動が存在している。我々のこのCo-educationについての研究はまだまだ足りないが、この問題を女子を加えた我々のクラブでの男女共同のスカウティングを展開し、スカウティングのCo-educationを思索したいと思う。
我々のクラブは、ローバースカウトの組織であるとともに、大学内の１つのサークルでもある。ボーイスカウトの枠は尊重しなければならないが、我々大学生という意味でのクラブの諸条件下で最も適した状態こそ、男女共同体であると考える。［…］即座に日本においてもスカウティングにおけるCo-educationを展開することは不可能であるとしても、我々次の世代を担うものとして、このことに大いに注目しなければならないと思う。特に我々大学ローバーのごとき、この共同体を作りやすい組織から、このCo-educationの問題に取り組むのが現在の実情から妥当であると思われる（p. 104）

慶應の事例と同じように、ここでも男女合同での活動こそが大学生年代にとって「最も適した状態」であるという理解が示されている。そしてそのための研究を目的として、「共同体を作りやすい」大学ローバーにおいて、「男女共同体を作成」することが志向されている。他方で「ボーイスカウトの枠は尊重しなければならない」という留保がなされている通り、当時女子部員は同好会の会員ではあるものの、ボーイスカウト組織の構成員ではない、という不安定な位置付けだったようである。

さらに男女合同での活動について、当時の活動方針はより踏み込んだ議論を展開している。以下は「共学」について論じた箇所である。

> 我々は小学校・中学校・高校・大学とほとんどの人は共学で育ってきたのであろう。今日の日本で、いや世界の各国でなぜ共学が人間の教育の場で取り上げられ、支持されてきたか、我々には難しいことは判らない。しかし、これが我々人間にとって最も自然な形であるからではないだろうか。
> ［……］極端な言い方をすれば、我々人間というものは男だけであっても、女だけであっても、やはり不自然なのだということである。スカウティングとは何も特別な教育の場ではなかろう（p. 104）

ここでは戦後学校教育が標準とした男女共学こそが「自然な形」であり、男女別の教育は「特別な教育」、すなわち不自然なものであるという理解が示されている。しかしながら、ここで示されているジェンダー観は、男女の差異を過剰に強調する特性論的なものであったことには留意が必要である。

> 我々男性は決して女性の有するものを甘くみてはならない。彼女らに何もできないというのは男性のエゴイズムであろう。［…］彼女らが我々に足らないものを補い、我々を一個の人間として完成させていくものと信じてやまない。
> ［……］
> 上記のような［男女共同の］組織を形成する場合、ローバーの活動がダウンするのではないだろうか？という危惧の念を抱くかもしれない。我々は思うに、このクラブにおいて現在足りないのは文化的活動であり、女性の参加により、この文化的活動は今まで以上により高次的なものへと目指すことになるであろう。
> 男女においても広範囲の視野が開けてくると確信する。しかしながら我々の危惧するダウンはあくまでも野外活動においてであろう。このダウンの存在を決して否定しない。しかし、この野外活動のダウンを文化的活動（アカデミックな面）に還元するとは考えられないだろうか（p. 104-5）

ここでは女性を男性に「足らないもの」、すなわち「文化的活動」を補完する存在とす

ることで、女子の加入を正当化している一方で、身体能力が劣ると考えられている女子の加入によって野外活動のレベルが「ダウン」する可能性についても述べられている。

なお、この当時の特性論的な考え方について、同志社ローバー OBの田中祥介は、シンポジウムのなかで以下のように反省的に振り返っている。

> 当然、B.P.〔ママ〕の時代からは社会が変化してきてます。男らしさと女らしさ、（中略）ジェンダーということと大きく関わってくる部分があろうと思うんです。男らしさ女らしさじゃなくて、個人の個性、または人間らしさじゃないかと。［…］じゃあ、ガールスカウトはどうなんだ。［…］当時の議論としては、ガールスカウトの考え方である良き家庭人はいかがなものかと。それよりもローバーの理念の中に女子が入ってもおかしくないんじゃないか（p. 24）

ここではスカウト運動（およびガイド運動）が成立した時代から社会は変化しているという認識の下で、運動が内包している男らしさ／女らしさといったジェンダーにまつわる理念――とりわけガイド運動の「良き家庭人」という良妻賢母像――が前時代的なものとなりつつあることが述べられている。また、当初懸念されていた女子受け入れにともなう活動レベルの低下についても、「女性が入ると野外活動のレベルが落ちると良く言いますけど、じゃあ、登山家の田部井淳子さんとか今井通子さんはどうなんだ」「決して体力差うんぬんということはなかったんじゃないかと、今はこう考えているわけです」（p. 25）と述べ、実際に男女合同での活動経験を積み重ねていく中で、否定的な見解が示されている。

このような議論を踏まえ、同志社ローバーでは、1977年頃から女子をスカウトとして日本連盟へ加盟登録することを試みていたという。当時の同志社大学スカウト同好会の会則には、「本会会員中男子会員は、日本ボーイスカウト京都第43団ローバースカウト隊隊員として、女子会員はボーイスカウトカブ隊指導者或いは、ガールスカウトアダルト隊隊員として登録することが望ましい」（p. 100）と記載されており、実際に女子部員はカブ隊指導者などの形で登録され、制服を着て活動していたようである。しかし、こうした形で登録するのは邪道であるという意見もあり、1977年と1978年には女子をローバー隊の一員として登録することを試みているが、「当然のことながら突き返された」という（p. 24）。しかしこうした試みは「あくまで自分達のための活動であって、広くこれからのボーイスカウト活動の中に、特にローバー世代に対して女性を入れていくんだということをアピールするんだということは、2次的、3次的な考えでした」（p. 25）と田中は述べており、スカウト運動全体、ないしは社会に対して働きかける意図はさほど強くなかったという。

4. 小括：ローバー部門における女子の受け入れ

以上の各大学におけるノンフォーマルな女子受け入れの実践例をまとめると、その特

徴として、①時代に合った活動のあり方（男女合同）と本来のローバー活動（男女別）とのディレンマ、および②性差を強調する特性論的な受け入れのロジックが挙げられる。①の女子受け入れは本来のローバー活動の理念とは相容れないという見方ゆえに、女子受け入れは活動の先駆的なあり方として位置づけられ、日本連盟など上層部からの反発を招いてしまっていた。また②について、女子を男子と較べて体力的に劣る一方で、より文化的な存在とする見方が根強く存在しており、女子を入れると野外活動のレベルが落ちる可能性が危惧されていた。他方で、そのような性差があるがゆえに、男女は一緒に活動すべきだ、という論理によって女子受け入れが正当化されていたと理解できる。

しかしながら、こうした大学ローバーの実践が日本連盟のポリシーに与えた影響は、当時は限定的なものであったと推察できる。これは、ひとつには同志社の事例についてパネリストの田中が述べているように、そうした実践は自分たちのための実践であり、外へと向かう変革を意図した実践ではなかったためである。何よりも、男女合同での活動が本来のローバー活動とは異なるという認識が支配的であったために、これらの実践がただちに日本連盟全体における女子受け入れへと向かっていく潮流を生み出すことはなかったと言えよう。

日本連盟の記録においては、ローバー部門における女子加入の是非が議論されるようになった最初のきっかけとして言及されているのは、1985年５月の制度調査委員会報告書においてローバー部門への女子の受け入れが提案されたことである（『スカウティング』1990.04: 36）。これに先立つ1976年には、すでに述べた通り、スカウト運動の本家である英国連盟が最年長部門に限り女子の受け入れを正式に認めており、こうした状況を受けてか、この頃になると、ローバースカウト側からも女子受け入れが問題提起されるようになる。たとえば1989年８月に行われた第２回ローバーシンポジウムでは、現在自分たちが抱える問題点の一つとして「ボーイスカウトの現状が、今すでに若者のニーズをとらえていない。大学ローバーは新入生のニーズに合わせてサークル化している」ことが主張され、その後のグループ討議では全４つの分科会中２つがローバーの活動を活発にしていくためには「女子スカウトの加入」が必要であるという意見を出している（『スカウティング』1990.02: 16-9）。その後同年11月のボーイスカウト／ガールスカウト両連盟の代表者らによる懇談会の中で、「ローバースカウト活動に女子のスカウトが参加できるようにする計画があるので、ガールスカウト側の理解を得たい」趣旨がガールスカウト側に伝えられている（『スカウティング』1990.01: 33）。

正式なかたちでローバー部門への女子受け入れが表面化するのは1989年12月の日本連盟中央審議会の会合であり、1985年の最初の女子加入提案を受けてこの問題を検討してきた諮問機関・制度委員会から提出された教育規定改正案の中に、ローバー部門への女子の加入が含まれていた（『スカウティング』1990.02: 34-5）。その後翌年２月の県コミッショナー研究集会の中で、ローバー部門への女子の参加について検討の経過と趣旨説明が為されている（『スカウティング』1990.03: 36）。そして３月中央審議会の再協議を経て、

「ローバー部門に女子を受け入れることは社会人としての資質を高めるために男子ローバーにも、女子ローバーにとっても意義があり、本運動の強化発展につらなるとの結論を得て」、このポリシーは５月の年次全国会議に提案することが承認された（『スカウティング』1990.04: 36）。そして５月の全国会議での議決をもって、ローバー部門への女子の参加を認める教育規定の改正案は可決され、翌1991年４月１日より施行された（『スカウティング』1990.07: 14）。

かくして最年長部門であるローバー部門は、他部門に先駆けて女子を受け入れるに至った。その背景には、英国連盟が女子の受け入れを始めたこと、第二波フェミニズムの成果としての男女雇用機会均等法（1985年）などの成立、といった社会状況が考えられるだろう。このように、比較的スムーズに女子の加入が承認に至ったローバー部門に対し、その後の他部門への女子受け入れは大きな反響を呼び、賛否両論の議論が展開された。次節ではこの議論の流れを見ていく。

Ⅲ　女子受け入れの経緯

本節では、ボーイスカウト日本連盟の機関誌である『スカウティング』誌[5]を主たる資料としながら、上述してきた女子受け入れをめぐる意思決定のプロセスと、それをめぐる読者の反応について検討していく。

『スカウティング』誌は、指導者としてボーイスカウト日本連盟に登録している者が購読している月刊誌であり、主たる読者は現場で活動に携わる指導者、および団委員などのマネジメント役である。今回資料として用いるのは1990年代に発行された巻号で、各種行事等の特集や読者からの投稿、日本連盟における会議の議事録などの記事を含んでいる。

以下ではまず、1995年の女子加入が承認されるに至った経緯を確認していく。その上で、同時期に掲載された女子受け入れにまつわる読者からの投書を資料とし、女子加入が承認されるに至った背景を分析していく。

1．21世紀委員会答申書と日本連盟における検討

1994年５月、ボーイスカウト日本連盟中央審議会に21世紀委員会より答申書が提出された。この委員会は21世紀に向けてボーイスカウト運動のあり方を検討することを目的とし、中長期にわたる計画の策定を任務として中央審議会によって設置されたものであり、およそ２年半の審議を通して作成された答申書には６項目からなる提言が含まれている。その筆頭である「提言１」は、「スカウト教育の対象及びその年齢やプログラムの見直し、また、女子の加入の促進を始め、各部門の特色ある活動や体制づくりを常時

5　以下本節では『スカウティング』誌からの引用は巻号とページ数のみを記す。

検討する」というものであり、ここに含まれる中項目（２）において、「全部門への女子の加入希望者の受入を促進し、そのための指導者養成とプログラム開発を早急に計画的に進める」ことが提言されていた（1994.12: 8-9）。

この提言に添えられている「提案趣旨」（1994.12: 9）からは、提案の背景を３点読み取ることができる。第一に、女子加入がスカウト運動における世界的な趨勢となっていることである。「男女の壁を廃してともに成長することを企図する方向」が世界的な趨勢であり、「すでに『ボーイ』を取り払い『スカウト連盟』と名称を変更した例もいくつか見られる」こと[6]が提案趣旨の筆頭で述べられている。第二に、社会におけるジェンダー規範の変化である。「長年にわたる男女の固定的性別役割分業の考え方を改め、あらゆる分野の活動で、方針決定を含め、男女が全く平等に参画することが社会の発展と安定を実現させるという考え方が一般的になりつつある」という時代認識が示された上で、「青少年期から男女が同じ場面でともに活動することによって、これまで目標としていた男女平等から、次の段階として互いに尊重しあうことを目指す」ことが必要であると述べられている。第三に、男女別での活動に対する違和感である。「子どもたちの意識は、約50年になろうとする男女共学の成果もあり、区別して活動することにかえって違和感を感じている場面すら見られる」として、戦後教育において共学が標準とされる中において、男女別団体の存在へ疑義が表明されている。このような状況認識の上に「創始者の目指したボーイスカウト教育のねらいにもかかわらず、時代の変化はスカウティングを少年だけを対象とした活動にのみとどめておけない状況に至っていること」が示され、「全部門への女子加入についての検討を組織全体の総合的な課題として早急に研究を広げ、深めることが必要である」と結論されている。

附言すると、女子加入の提案趣旨においては明確に述べられていないものの、こうした提言の背景には明らかに、スカウト数の減少という問題も横たわっている。日本連盟の登録人員数は1983年をピークに減少に転じている（田中 1995: 170-1）が、答申書の現状認識・問題提起の中でも、「出生率の低下、少子化現象など、我が国の人口動態調査から分析すると、今世紀末にはスカウト数は二万人程度が減少すると予測している」（1994.12: 7）と述べられている。そもそも「21世紀委員会」という名称が反映している通り、これら答申書はスカウト運動衰退への切実な危機感も相まって、来る新世紀に向けた組織の抜本的改革を要求するものであり、女子の加入もまたそうした文脈の中で提起された改革案のひとつとして理解すべきであろう。

この21世紀委員会答申こそが、日本における女子受け入れの直接的な契機となり、以降日本連盟内部で検討が重ねられていくこととなる。表２は答申書が提出されてから

6　この女子受け入れの趨勢については、「ボーイスカウトとガールスカウトが同じ一つの連盟になっていたり、男女を問わず受け入れる組織になっていたり、我が国のように部門によって（多くの場合年長の部門）受け入れていたりと、さまざまである」と述べられている（1994.12: 5）。当時の状況として、全部門に女子が加入している国は36ヶ国、一部部門に女子が加入している国は22ヶ国、女子が全く加入していない国は52ヶ国であった（1995.7: 23）。

1995年９月に実際に女子の受入が施行されるまでに行われた日本連盟の会議のうち、女子受け入れ問題が議論されたものをリストアップしたものである。

21世紀委員会による答申書が提出された1994年５月の中央審議会では、男女共学化を「ボーイスカウト原理の変革」であるとまで述べる意見が出ている。また､ここではガールスカウト日本連盟との調整の必要性が提起されている点は重要である。（ボーイ）スカウト運動に女子を受け入れることは、英国のケースではガイド運動側の強固な反発を招いており（Mills 2011: 550)、ガールスカウト日本連盟との間に軋轢が生じることを避けるために、あらかじめの調整の必要性が提起されたと理解できる。

表2　1990年代の女子受け入れの承認に至るまでの流れ（1994.7-1995.9より筆者作成）

	会議	動き	協議内容
‘94年 05/14	中央審議会	二十一世紀委員会答申書の提出	･「ボーイスカウト原理の変革」であるという意見が出る ・ガールスカウト日本連盟との調整の必要性が提起される
07/09	中央審議会	継続審議	・ガールスカウト日本連盟からボーイスカウトとの関係性についての文書が提出される
10/08	中央審議会	継続審議	･「現行の教育体制の中で受け入れていく」方針の確認
12/10	中央審議会	継続審議（５月 全 国会議への上程を決定）	【賛成論】 ・21世紀においては男女が共に学び活動することは「前提」であり、今更男女を分ける意味はない 【慎重論】 ・ボーイスカウト運動は「男らしい男の子を育てる」ことを長い歴史の中で取り組んできたので、もっと各方面で議論が為されるべき ・以前から正式ではないにしても折に触れて議論されてきた問題だが、正式な議案となるのは初めてであり、検討不十分な感が否めず、慎重になるべき ･「男女混合は世界の趨勢」とあるが女子を受け入れているのは136ヶ連盟中50ヶ連盟前後であり、まだ研究の余地がある
‘95年 01/28	運営委員長会同	打ち合わせ	関連委員会の対応について調整
02/11	中央審議会	調整	基本方針の調整（①各団の裁量によって女子を受け入れる、②現行の組織／プログラムの中で受け入れる、など）
03/12	中央審議会	調整	・女子受け入れの基本的理念が曖昧であり、現場のリーダーを納得させられるだけの提案理由が必要である ・放任的すぎる。ガイドラインの策定が必要ではないか ･「ボーイスカウト」という名称をどうするのか
04/28	運営委員長会同	打ち合わせ	細部の調整（教育規定の変更など）を中央審議会に付託する方針を決定
５月	年次全国会議	承認	第５号議案「全部門への女子の加入に関すること及びその承認を求める件」
07/08	中央審議会	調整	・制服は男女共用を原則とする方針 ・女子スカウトを受け入れる隊に女性指導者を置く必要性の検討、など

同年７月の中央審議会での継続審議の際には、ガールスカウト日本連盟からボーイスカウトとの関係性についての文書が提出されている。この文書の具体的な内容については記載されていないものの、こうした一連のガールスカウトとの調整の結果は、後日「（社）ガールスカウト日本連盟と（財）ボーイスカウト日本連盟の関係に関する共同声明」という形で結実している。この共同声明は1992年にガールガイド・ガールスカウト世界連盟と世界スカウト機構の間で取り交わされた共同声明書に則り作成されたものであり、そのねらいは「両連盟が創始者を同じくする青少年組織としてそれぞれの伝統と特性を尊重し合いながら、建設的に女性と男性のパートナーシップによる社会を目指し、各組織の目的を達成すること」にあるとされている（1995.2: 28-9）。ここで注目しておくべきは、「両連盟はそれぞれ独立自治であり、個々に特徴のある使命をもっていることを確認する［…］両連盟の構成組織が会員増加を図るため、相互に助け合うことを奨励する。ただし、それは相手連盟の会員を引き抜くことではない」（1995.2: 28-9, 傍点引用者）という「特記事項」が付けられている点であろう。ここで言われている「相手連盟の会員を引き抜くこと」という文言は、当時ボーイスカウト運動への女子加入をめぐる調整が行われていたという文脈を考えると、両連盟の軋轢を回避するための声明、という側面を持つものであると捉えるべきであろう。このような経緯を経て、かつて大学ローバーの実践が意図したようなボーイ／ガールという枠組みを超えた運動の再構築ではなく、既存の枠組みを維持したままの形で女子の受け入れは模索されていくこととなった。

10月には基本的な方針として「現行の教育体制の中で受け入れていく」方針が改めて確認され、12月の中央審議会での審議を経て、女子加入は翌年５月の年次全国会議へと上程されることが決定された。ここでは、21世紀においては男女が共に学び活動することは「前提」であり、今更男女を分けることに意味はないとする賛成論から、女子加入のポリシーは未だ検討不十分であり、もっと各方面での議論を要するとする慎重論まで、様々な意見が述べられている。しかしながら、ここでは明確な反対意見は掲載されておらず、この議案は全国会議での議決に委ねられることとなった。

このような各種の調整を経て、女子加入の議案は５月の年次全国会議に第５号議案「全部門への女子の加入に関すること及びその承認を求める件」として上程され、出席議員の３分の２以上の賛成を経て可決された。これをもって、日本のボーイスカウト運動において女子の加入が正式に承認されたのであった。

なお、議決の前後では、女子加入をめぐる細部の調整および基本方針の策定が行われている。たとえば「ボーイスカウト」という現行の名称について、女子を受け入れている他国連盟に倣い、「ボーイ」の語を廃して「スカウト」とすることなどが検討されている。結果的に日本語名称は「ボーイスカウト」のまま変更は為されなかったが、英語名称からは「Boy」の語が取り払われ、「Scout Association of Japan」と変更されている。また、教育規定の文章の内、「少年」と記載されていた部分は「青少年」「児童」などに

変更された[7]。

2. 女子受け入れの承認

こうした経緯を経て承認された全部門への女子加入については、『スカウティング』誌1995年７月号において、「決定事項」として誌面を割いて報告がなされている。「女子の受け入れにあたっては、あくまでも現行の組織、プログラムの中で各団の裁量にまかされるものである」という付記がなされているものの、「受け入れ時期についてはビーバー部門は平成七年九月から受け入れることができる」、その他の部門についても「関係委員会と調整して時期を定め、実施については中央審議会に一任する」とされている（1995.07: 22）。

誌面には、当時の日本連盟総長・渡邉昭と中央審議会議長・上島真一郎のコメントが並んで掲載されている。このコメントは審議過程において「ボーイスカウト原理の変革」とまで言われた女子の受け入れを、現場の指導者らが容認可能なかたちで提示する意図が感じられるものとなっている。たとえば総長・渡邉のコメントは以下のようなものである。

> このたび、私たちボーイスカウトの仲間に女子を受け入れていくことが決まりました。ついに、少年たちの活動の場にスカウトとして女の子たちが加わってくるのです。
> しかし何も驚くことはありません。この楽しい運動は本来、学校のように我々大人が用意した場所で子どもたちに教えるのではなく、「冒険したい」子どもたちが自由に集まり大自然に飛び出していくものなのです。私たち大人はほんの少しそのお手伝いをするだけなのです。
> こうした自発的な子どもたちの楽しい輪の中に女の子がいたとしても何の不思議もありません。むしろこの現代社会においては当然と考えて良いでしょう。そんなとき、大人が女の子だけを追い出すことなどできません（1995.07: 22）

ここで展開されている論理は極めて簡潔である。言うなれば渡邉はここで、スカウト運動の本質を「自発的な子どもたちの楽しい輪の中」から始まるものであるとした上で、それを現代の文脈において解釈しなおすことで女子の受け入れを正当化しているのである。

スカウト運動の本質に立ち返った上でそれを再解釈するという論理は、中央審議会議長・上島のコメントにも共通している。

> ボーイスカウト運動の創始者ベーデン - パウエル卿が「スカウティング・フォア・ボーイズ」を世に送り出した二〇世紀初頭の英国社会では男女の役割は明確に区分されており、その分担に

7　この他、ビーバースカウト部門、カブスカウト部門の「やくそく」の中で用いられている一人称は「ぼく」から「ぼく（わたくし）」に変更されている。

即した人間教育が時代の要請でした。

B-Pは「スカウティングはゲームである」といい、そのゲームを通じて体得すべきものはフェアプレーの精神だと言っています。それは彼の時代の英国社会においては男だけの世界でのみ体得できる騎士道精神でしたが、男女が共生する現代社会においては、性別を問わず同じ社会の一員として体得すべき普遍的な精神だといえます。少年少女が共に活動に楽しく参加できる環境を設け、彼らが正しくゲームを行いながらこのフェアプレーの精神を身につけていくことには、B-Pも双手を挙げて賛成することでしょう（1995.07: 22-3）

ここで上島は、創始者の名前を登場させ、その意図の再考を促すことによって女子受け入れを正当化していると言える。さらにこれに続く部分では、女子を受け入れることに伴う困難についても認めつつも、「そうした心配ごとの一つひとつに引き留められて方針の決定を先送りにすれば、日本のスカウト運動はそれだけ時代から取り残されたものとなってしまいます」と、運動衰退の危機について言及している。その上で、「男女一緒の活動になってもこうしたスカウティングの基本には変わりはありません」「社会の変化から目をそらして硬直化、衰退していく運動を傍観することなく、我々スカウターはいつの時代においても開拓者、パイオニアの精神を忘れずに前進していかなければならないと思います」とコメントを結んでいる（1995.07: 22-3）。

3. 受け入れ賛成論

以上、ボーイスカウト日本連盟における女子加入の経緯を確認してきた。では女子の受け入れという方針に対する現場の反応はいかなるものであったのか。以下では、女子受け入れが検討されていた時期に『スカウティング』誌に掲載された女子受け入れにまつわる言説を分析し、女子受け入れが促進された要因および1990年代に至るまで男女別での活動が維持された要因について検討する。

まず本項では、女子受け入れに対する肯定的な反応を検討する。具体的には、女子加入に賛成の立場の言説として、①社会の変化、②活動の魅力化、③運動の存続という３類型を確認していく。

①社会の変化

まず、女子受け入れに賛成する論のほとんどに共通する言説として、社会のジェンダー規範が変化していることを指摘するものが見られる。

これら言説においては、「もともとルーツが同じであるが、組織を分けてきた歴史的経緯は理解できます。それぞれに時代的な価値があったと信じています」（1994.12: 26）と、スカウト／ガイド運動がもともと男女別団体として組織された経緯については理解が示されている。しかし、「戦後日本の学校教育も男女共学となり、最近では男女の差別が云々されるほどの社会的変革をしている」（1994.10: 38）といったように、社会は

変化しており、それゆえ両運動が分断されている現状は「不自然としか思えません」（1994.12: 27）と述べられている。ここでは共学を標準とする学校教育が主に参照されつつ、男女別での活動を不自然なものだという感覚が表明されており、それが女子受け入れを擁護する根拠として動員されているのである。同じような活動をしているのにもかかわらず、一緒に活動しないことへの違和感は、以下の投書にも端的にあらわれている。

> しばしばすぐ横にガールスカウトがテントを並べてキャンプをすることがあるので、ガールの子たちがみんな声をかけてくれます。しかし、すぐ隣で同じようにキャンプをしているのに、一緒に一つの活動をすることがほとんどないというのは、何ともさみしいことです（1995.03: 29）

こうした言説は、前節の大学ローバーの実践においても、21世紀委員会答申書のなかでも言及されていた内容であり、女子の受け入れを考えるに際しては常に参照され続けてきた言説であると言えよう。

しかしながら、この社会におけるジェンダー規範の変化や、教育において共学を標準／別学を非標準とする認識は、後述する受け入れ反対論／慎重論においても前提として共有されている点は指摘しておくべきであろう。すなわちこれら言説は、社会は変化しているけれども、といった逆接によって男女別の活動を擁護する論にも接合可能性をもっており、この言説単独では女子加入を正当化する根拠としては機能していない。むしろ社会の変化言説は、以下で検討していく他の言説と結びつくことで、その説得性を増強する機能を果たしていると言える。

②活動の魅力化

積極的に女子受け入れを肯定する言説として、男女一緒で活動することによって、より運動が魅力的なものとなる、というものがある。「ボーイスカウトとガールスカウト活動の一体化について」と題された以下の投書はその典型である。

> 各県のボーイスカウト活動に、ガールスカウト団の参加を呼びかけたところ、ガールスカウトの集会では何かと理由をつけて欠席するスカウトも、ボーイとの合同参加では積極的に出席するという。若い男女のスカウトたちが一緒に活動することには、相互に楽しさ面白さが倍増する魅力があることは間違いないのであろう（1994.10: 38）

前節で検討してきた大学ローバーの事例においては女子を受け入れることで活動レベルが下がることが懸念されていたのに対し、1990年代の言説においては、実際にガールスカウトと一緒に活動した経験を踏まえた言説が見られる。たとえばガールスカウトと一緒に活動することを「最初は違う世界のように思われ不安でした」と述べるシニアー

スカウトは、ガールスカウトの野外活動のスキルに感心した経験を以下のように綴っている。

> それでもガールの子たちは、ボーイ隊より少し大きめのテントを、多少時間はかかるもののきれいに張ってしまいます。これにはとても感心しましたし、言葉に言い表せないような新鮮さを感じました。もちろん我々シニアー隊員もいろいろ学ぶことはたくさんあります。自分がキャンプで作ったことがない料理を出してもらったりすると、見せてもらって覚えるようにしています（1995.03: 29）

ガールスカウトと一緒の活動から「いろいろ学ぶことはたくさんあります」と述べ、さらには「いつも参加しているシニアー隊員四、五人にはあだ名がつけられ、ある意味で人気者になってしまい、私としてはほっとしましたし、大変うれしかったです」（1995.03: 29）として、男女一緒の活動の魅力を強調している。

このように女子受け入れに賛成の立場においては、男女一緒に活動することがスカウト運動をより魅力化する方法であると肯定されている。そうした積極的な賛成論に対し、前項までに見てきたような加盟員数が減少しつつあるスカウト運動の存続のために女子受け入れが必要であるとする、いわば消極的な賛成論も存在している。

③運動の存続

スカウト運動衰退への危機感は、加盟員数の減少というかたちで現場の指導者らにも共有されており、女子受け入れの賛否をめぐる投書のなかでも言及されている。

> もし二一世紀までにこの運動が一体化できなければ、両組織の存続は有り得ないと私は考えています。［……］育成団体の一体化だけでも推進すべきでしょう。もし、育成団体が同じでガールとボーイの団を持つことができるなら、両者の加盟員は三〇％以上増加すると信じています。（うまくいけば五〇％の増加も有り得ると考えます）もし、二一世紀までにこの問題に整理をつけられなければ、ボーイスカウト運動の加盟員の減少率からみると、私の地区では二一世紀の最初にはほとんどの団で加盟員がいない計算になりました（1994.12: 26）

> ここいらで、ボーイスカウト日本連盟もガールスカウト日本連盟も、スカウトの活動プログラムの一体化を図って、この運動を行えば双方にプラスの面が働き、組織拡大にご苦労されている加盟員の倍増にも役立つのではないだろうか（1994.10: 38）

ここでは、このままでは「両組織の存続は有り得ない」という見通しが示され、加盟員数の増加を図る現実的な方策として男女一緒に活動することが提案されている。「私は今すぐにでもガールとボーイの組織の問題に手をつけないと、手遅れであると思います」

（1994.12: 27）とも述べられている通り、この問題は差し迫ったきわめて切実なものとして語られている。

ここで確認しておくべきは、運動の「一体化」という言い回しにあらわれている通り、これらの言説において想定されている女子加入とは、ボーイスカウトが女子を受け入れる、という形式ではなく、ガールスカウトとの組織レベルでの統合であることが分かる。前項までに確認してきた通り、実際にボーイスカウト日本連盟内部で検討されていた女子受け入れのあり方は、両運動の枠組みをあくまで維持した上で、ボーイスカウトへの女子の参加を認める、というものであったが、『スカウティング』誌への現場の指導者らからの投書において想定されているのはボーイスカウトとガールスカウトとの統合であり、ここに認識の齟齬が生じていた可能性が指摘できる。こうした食い違いは、賛成論のみならず、以下に検討していく女子受け入れ反対論／慎重論においても見られる問題である。

4. 受け入れ反対論／慎重論

前項で検討してきた賛成の言説に対して、本節では女子受け入れに対するネガティブな言説を検討する。具体的には、①活動の「女性化」、②男女合同での活動への忌避、③男女別活動の価値、④創始者の影響力の４類型である。

①活動の「女性化」

まずは「女子を入れると活動のレベルが落ちる」といった類の言説であり、前節で検討した大学ローバーにおいて懸念されていた内容とおおむね同一の内容が、1990年代の議論においても展開されている。以下のビーバー隊女性副長による投書はその典型であろう。

> まず、女の子もOKといえば、女の子の方がうんと増えるだろうということです。こういった活動に対しておおむね女の子の方が、そしてお母さんの方が積極的ですし運営もソフトで上手ですから、女性リーダーが多くなり、あっという間にビーバー、カブはお母さんたちにのっとられるでしょう。そして、子ども会と何ら変わりない活動になってしまいはしないか、と心配します。［……］
> 現在カブが女性化しています。デンダットがなくなって、男性の出番が減りました。男性副長も育てにくくなりました。週休二日は現場サイドではまだまだ遠い話ですから、デンリーダーは女性です。［…］その結果、活動内容は女性的になっています。かゆいところに手が届くめんどう見の良さです。
> 家ではお母さんにくどくど叱られ、ボーイスカウト活動ではデンリーダーがヒスをおこしている…。いったいボーイスカウトのセールスポイントは何なんだろうと思います（1995.03: 14）

ここで展開されている論理は、スカウトとしての女子の受け入れと指導者としての女性の受け入れとが混同されているものの、全体として女子を受け入れることによって活動が「お母さんたちにのっとられ」、「子ども会と何ら変わりない活動」となってしまう、すなわち「女性的」になってしまうという危惧である。その「女性化」をもたらすのは、女性特有の「かゆいところに手が届くめんどう見の良さ」、つまり女性とケア役割との結びつきである。

このような「女性化」に対する危惧は、父親よりも母親の方がより時間があるために活動に参加しやすいという実感に支えられている。21世紀委員会答申書の女子加入の提案について「頭にきた」と述べる指導者は、「なぜ女性が増えたかを考えれば［…］“時間がある”の一点です。“会議に出られる（時間がある）リーダーが良い”のではありません」と述べ、スカウト活動の場に女性が増えることへの忌避感を表明している（1995.03: 12）。またこの指導者は、答申書の提案について「［男女平等が］ブームであることは理解できますが、そのことの是非が本音で議論された記憶はありません［…］“女子大生の就職難”こそ、社会の本音だと考えます」（1995.03: 12）と述べており、女性の社会進出が一過性の「ブーム」であるとし、「“女子大生の就職難”」に言及しながら、男性領域に女性が進出することに対する強い拒否感を表明している。

他方、ここで思い出しておくべきは、前節で検討した同志社ローバーの実践において、このような活動の「女性化」については、肯定的な側面も強調されていたことであろう。「女性化」言説は、活動内容のレベルが落ちるというネガティブな側面が語られる一方で、女子の特性を強調することでポジティブな評価にも接合しうるものであったと言える。

②男女合同での活動への忌避

活動内容の「女性化」への危惧という積極的な反対理由にまでは至らないものの、男女が一緒に活動することそれ自体に対する漠然とした忌避感から女子受け入れに慎重であるべきとする言説も見られる。たとえば、以下は指導者としても活動するローバースカウトによる投書である。

> 私の意見としては、現状では賛成できません。実は私も11NJ[8]の指導者としてボーイを見ていましたが、時期尚早ではないかと思うのです。一人のガールに、ボーイが列をなしてサインをねだっている光景を見ていると、まだ異性に対する認識が非常に甘いのではないかと思えたくらいです（1995.03: 28）

ここでは中学生年代のスカウトたちの「異性に対する認識」の甘さが男女合同での活動に対する反対理由として挙げられている。学校教育において共学が一般的であるにもか

8　1994年に大分県・久住高原で開催された全国大会「第11回日本ジャンボリー」の略。

かわらず、ここでは男女が一緒に活動することに対して、いわば過剰に性的な意味づけがなされていると言えるだろう。

ここで注意しておくべきは、こうした意味づけは、女子受け入れに賛成する立場においても散見される点である。たとえばオーストラリアで開催された大会に日本派遣団長として参加した指導者による投書はその典型である。

> オーストラリア連盟はすでにボーイスカウト部門とガールスカウト部門が一本化されており、大会キャンプ場では、十五、六の少女たちが汗にまみれながら男のシニアースカウトたちの中で一緒に活動していた。
> ハチ切れそうな胸をシャツの中からのぞかせて動き回っているのを見て、私も最初は目のやり場がなかったのを覚えている。
> もちろん、日本からのスカウトたちも彼女らの胸元を見て見ぬふりをしながら、日本のスカウト同士で目を見合わせたりしていたが、二、三日もたつともはや男女の区別なく一緒に行動していたようである（1994.10: 38）

ここでは一緒に活動をしていくうちに、異性と一緒に活動することに順応していったスカウトたちの姿が紹介されている。また、実際にガールスカウトと一緒に活動してきたという高校生年代のスカウトは、「まだそれほど長い期間ではありませんが、一緒に活動し、見てきた限り、ボーイスカウト・ガールスカウトが混合で活動しても、日頃の活動では特に問題はないように思います」と述べ、何か問題があるのだとしても「それは時間はかかるにしろ、いずれ解決できるものではないでしょうか」としている（1995.03:29）。

このような男女合同での活動に性的な意味を読み取り、漠然と忌避する言説は賛成・反対の立場にかかわらず語られているものの、スカウト運動が教育運動であるがゆえに、それを乗り越え可能な問題であるとする理路も存在しており、したがってこれら忌避言説は、女子受け入れの反対する強い根拠とはなりえなかったと言えよう。

③男女別活動の価値

以上は女子の受け入れをネガティブに捉える言説であったが、それらとは別に、学校教育やその他の団体とは異なる男女別団体であることを積極的に肯定していく言説も見られる。

> すぐに、ボーイとガールを統一しようとするのは間違っていると思います。お互いの組織ともに、長年のスタンスを変えてしまうのはあまりにも危険であると思いますし、第一にいざ統合したからといって、加盟員が増えるというのも短絡的な考えであると思うのです。（つまり他の青少年団体は男女混合なのにこれといった利点というものも見当たらないから）［……］ガールとさえ手を結べば何とかなるような考えは捨てて、両組織を「混合」するのではなく、「交流」を段階

的にすすめてゆくのです（1995.03: 28）

男女共学の世の中にあっても、男子校、女子校が健在であるように、私はボーイスカウト、ガールスカウトはこのままで良いと思います。[……] カブ年齢では、女の子の方が何をやってもウマいでしょう。ボーイも低年齢化してしまいましたから、男の子たちはバカにされるでしょう。ここまでは隊組織は男女別々の方が良いと思います。（学校が共学だからこそです）シニアーから上はどんどん一緒に活動させれば良いと思います。（思春期もすぎ、親がかりでもなくなってきています）そして中学生までは、ガールスカウトとの交流の機会をできるだけ多く持ち、リーダーもお互いに協力し合い、刺激し合うことが大切なのではないかと思います。（1995.03: 14）

「他の青少年団体は男女混合なのに」「学校が共学だからこそ」といった文言にあらわれている通り、これらの言説は学校をはじめとした教育において男女共学が標準であり、別学が非標準的とされる状況をはっきりと認めた上で、それでも男女別で活動することには固有の意義があることを主張している。こうした主張は、運動衰退への危機感からスカウト運動の独自性をアピールしていく必要性に迫られた1990年代以降に顕著であり、大学ローバーの実践の時点ではあまり前景化していなかったロジックである。

その上で、これらの言説においては「両組織を『混合』するのではなく、『交流』を段階的にすすめてゆく」べきであり、「ガールスカウトとの交流の機会をできるだけ多く持」つことが重要であることが主張されている。前項でも確認した通り、ここでも女子加入のあり方として想定されているのは、「ボーイとガールを統一しようとする」、すなわちガールスカウトとの組織レベルでの統合であることが分かる。換言すれば、これら言説はボーイスカウトへの女子加入の是非ではなく、ボーイとガールの組織的統合の是非について語っており、それゆえに議論がうまく噛み合っていなかった可能性については指摘しておくことが可能であろう[9]。

④創始者の影響力

ここまで1990年代の女子加入に対する反対論／慎重論として、女子受け入れに積極的

9　なお、ここまでに見てきたような21世紀委員会答申書への否定的反響に対しては、21世紀委員会委員長･杉原正によって応答がなされている。

女子の受け入れについては「ボーイスカウト活動に参加を希望する女子を受け入れることができる」ということであって、「女子を受け入れなくてはならない」ということではありません。女子であってもボーイスカウトの活動に参加したいという希望者が現れた場合にこれまでのように一方的に拒むのではなく、受け入れる体制づくりをする、という第一歩を踏み出すことの可否を決定することを提案しました［……］これまで男子のみを対象に進めてきた活動に参加を希望する女子を受け入れることで互いの立場を理解し、尊重することを通じて、より一層の教育効果を求めることも21世紀のボーイスカウト活動の発展にとって必要であり、早急に検討を要する時期にきているという検討結果を基に提案したものです（1995.03: 16）

ここで強調されていることは、女子受け入れは強制的なものではなく、あくまで選択肢の拡充であるという点であるが、他方で「これまで男子のみを対象に進めてきた活動に参加を希望する女子を受け入れること」といった言い回しは、この女子加入をめぐる誤解――ガールスカウトとの組織的統合――に対する訂正の意図もあるのだろう。

に反対する①活動の「女性化」言説、消極的に反対する②男女合同での活動への忌避言説、そして③男女別活動の価値言説を検討してきた。以上3点に加えて、男女別での活動が維持されてきた背景として、④創始者の影響力を挙げておきたい。

スカウト／ガイド運動はその他の青少年運動と比較しても、その創始者に方法も組織も全面的に負っている面が非常に大きい（田中 1995: iii-iv）。前項までに見てきた通り、21世紀委員会が女子加入を提案した際に中央審議会では「ボーイスカウト原理の変革」であるとする意見が出されており、また「決定事項」として女子加入の承認を伝える『スカウティング』誌の記事においても、スカウト運動の本質に立ち返った上でそれを再解釈するというロジックが用いられていた。こうした経緯を鑑みるに、男女を異なった団体によって教育すべきとした創始者B-Pの影響力の大きさが、女子受け入れに際しても阻害要因のひとつとなったと考えられる。

なお、世界的にはこの後、1999年に世界スカウト機構が*Policy on Girls and Boys, Women and Men within the Scout Movement*（『スカウト運動における少年少女と男女に関する方針』）を発表し、スカウト運動におけるジェンダーの問題について初めて明確に検討し、各国の加盟員資格、青少年プログラム、スカウティングにおける成人、マネジメントへの関与といった事項について明確な規定を示している（WOSM 1999=2001: 1）。このポリシーの中では、女子の受け入れについて、社会的に「男女が共に学ぶことが許されない連盟にあっては」男女別のままでも構わない、としている一方で、「男女が共にかかわり合うことが受け入れられている社会［…］あるいはそうなりつつある社会」においては男女が共に学ぶことが積極的に奨励され、「加盟員資格が両性に開かれている連盟は男女の教育上のニーズを同等に取り扱わねばならない」という方針が述べられている（WOSM 1999=2001: 3-4）。これはまさしく、1990年代までにスカウト運動の男女共学化が世界的趨勢となり、明確なポリシーの策定が急がれた結果と言えるだろう。

5. 小括：1990年代における女子の受け入れ

以上1990年代における女子受け入れの経緯およびそれをめぐる言説を検討してきた。大まかに整理すれば、前節で見てきた大学ローバーにおけるインフォーマルな「コ・エデュケーション」の実践が行われた時期からフォーマルな形での女子加入が実現した1990年代半ばまで、女子受け入れをめぐる動向の背後には、①日本社会におけるジェンダー規範の変化、および②他国連盟における女子加入という世界的趨勢、といった背景が常にあった。しかし、こうした背景を建前としつつ、より直接的に女子受け入れを推進する原動力となったのは、1980年代以降スカウト人口が減少に転じたことによる③スカウト運動衰退への危機感であったようである。そして女子加入の直接的な契機となった「21世紀委員会」という名称がいみじくも表している通り、④21世紀を前にした変革志向の高まりがそれを後押ししたと言えよう。これら複数の要因が噛み合った結果とし

て1990年代にスカウト運動への女子の受け入れというジェンダー政策の転換が用意されたのである。

女子加入の是非にかんする議論においては、女子を受け入れることにともなう活動の質の変化について語られることが多く、大学ローバーによる実践の時点で、活動レベルの低下が懸念されていた一方で、性差ゆえに男女が一緒に活動する意義があるとする特性論的な見方も存在していた。こうした活動の質の変化にまつわる言説は1990年代においても存在しているが、実際にガールスカウトと一緒に活動した経験を通じて、そうした懸念は払拭されたと語る論も見られた。むしろ1990年代においては、加盟員数の減少を背景に、女子を受け入れることが活動を魅力化するか否かが争点となっていたとも言える。

おわりに

本論文では、ボーイスカウト日本連盟における女子受け入れのプロセスについて検討してきた。最後に、本論文の知見を「ジェンダーと教育」研究一般の知見と接続し、インプリケーションを示す。

すでに論じてきた通り、1980年代以前の日本の大学ローバーによる実践において男女合同での活動を正当化するために動員されたロジックは、女子の文化的側面という特性を強調するものであり、同時期に学校教育において男女の「特性に応じた教育」が強調されるようになったロジックと相似している。小山静子（2016）は、戦後の学校教育においては「男女は異なっているから別々の教育を受けるべきだ、という戦前の論理から打って変わって、異なるからこそ、ともに学校で学ぶことに意味がある」（小山 2016: 219）と主張されたことによって、男女共学を実施する理論的根拠が得られたと述べるが、男子に野外活動を、女子に文化的活動を求める大学ローバーの論理は、同時代の学校教育における特性教育の枠組みをはみ出るものではなかったと言える。

1990年代の女子受け入れの時点においては、少なくとも日本連盟のフォーマルな言説においては、こうした特性教育的な見解はやや後景に退いている。しかし小山が「男女平等な教育の内実とは、女子に対する教育の『問題』を改善し、男子が享受していた教育を女子にも与えるということを意味していた」（小山 2016: 219）と述べる通り、ボーイスカウトとガールスカウトの組織的統合ではなく、「男子向け教育」として元来構想されたボーイスカウトに女子を受け入れるという決定は――それがたとえ現実的な落としどころであったとしても――小山が「差異と平等の二重構造」と呼ぶ、「女子のみが男女の差異と平等というジェンダーの二重構造を意識」させられる特性教育の発想（小山 2016: 220）のあくまで延長線上にあるものとして理解できるだろう。ここで問われなければならないのは、「反省されないままの『男子教育』を基準に非対称なジェンダー秩序を内包した形」での形式的な男女共学が、ジェンダーによる実質的な不平等を再生

産してしまう、より巧妙な制度となってはいないか、という問題であろう（石岡 2021: 319-20）。

他方で、スカウト運動における男女別活動を価値づける言説において、学校教育が共学であるという事実が参照されていたことを考えると、「戦後教育のジェンダー秩序」を理解するに際して、学校教育の外側で展開されてきた青少年教育運動をはじめとするいわゆる社会教育の営みにも目を向けることの重要性が浮き彫りになるのではないだろうか。というのも、スカウト運動は戦後男女共学が標準となってから、実に半世紀近く男女別団体であり続けてきたのであるが、その体制が維持されてきた背景として、学校教育が共学であることが影響を与えている可能性は否めないからである。このように、フォーマルな学校教育のジェンダー秩序が、学校外で展開されてきたノン・フォーマルな教育の営みといかなる相互関係にあるのかを検討してはじめて、「戦後教育のジェンダー秩序」の全体像が把握できるとは言えないだろうか。

本論文の分析は、スカウト／ガイド運動のジェンダー秩序を明らかにするための大まかな見取り図を示すことを企図したものであり、資料上の制約により、女子受け入れをめぐる議論の全体像を網羅したものではない。実際、女子の受け入れは現場の裁量に委ねられていることから、地域や団によって展開されている議論は異なっている可能性があり、今後はよりミクロな言説も含めて検討を進めていく必要があるだろう。ジェンダー視点を導入した社会教育研究にはまだ開拓の余地があり、そこには「ジェンダーと教育」研究をより豊穣なものとする可能性が残されているように思われる。

（よこやま　りく・高崎経済大学経済学部非常勤講師）

参考文献

圓入智仁，2011，『海洋少年団の組織と活動——戦前の社会教育実践史』九州大学出版会.

ガールスカウト日本連盟 2010『きれいな心となんでもできる手 ———ガールスカウトになったなら』PHP 研究所

石岡学, 2021,「『男女共学』の百面相」小山静子･石岡学編『男女共学の成立——受容の多様性とジェンダー』六花出版，pp. 306-22.

加藤千香子，2014，『近代日本の国民統合とジェンダー』日本経済評論社.

小山静子，1991，『良妻賢母という規範』勁草書房.

————，2009，『戦後教育のジェンダー秩序』勁草書房.

————，2016，「戦後教育における学校 - 家族関係——ジェンダーとセクシュアリティの視点から考える」小玉重夫編『岩波講座 教育 変革への展望 6　学校のポリティクス』岩波書店，pp. 215-40.

————編，2015，『男女別学の時代——戦前期中等教育のジェンダー比較』柏書房.

————・石岡学編『男女共学の成立——受容の多様性とジェンダー』六花出版.

Kühne, Thomas ed., 1996, *Männergeschichte-Geschlechtergeschichte: Männlichkeit im Wandel der Moderne*, Frankfurt and New York: Campus.（=1997，星乃治彦『男の歴史——市民社会と〈男らしさ〉の神話』柏書房.）

Mills, Sarah, 2011, “Scouting for girls? Gender and the Scout Movement in Britain,” *Gender, Place and*

Culture: a journal of feminist geography, 18 (4), pp.537-56.
Mosse, George L., 1996, *The Image of Man: The Creation of Modern Masculinity*, Oxford: Oxford University Press.（=2005, 細谷実・海妻径子・小玉亮子訳『男のイメージ――男性性の創造と近代社会』作品社.）
中藤洋子, 2001,「社会教育史研究の現状と課題――ジェンダーの視点から」日本社会教育学会編『ジェンダーと社会教育――日本の社会教育第45集』東洋館出版社, pp. 76-88.
佐藤三三, 2001,「社会教育研究におけるジェンダーの問題構造」日本社会教育学会編『ジェンダーと社会教育――日本の社会教育第45集』東洋館出版社, pp. 63-74.
スカウティング研究センター編, 1998,『日本の大学ローバーは何をしてきたか――早稲田、慶應義塾、同志社の経験から』.
田中治彦, 1995,『ボーイスカウト――20世紀青少年運動の原型』中央公論社.
――――, 1999,『少年団運動の成立と展開――英国ボーイスカウトから学校少年団まで』九州大学出版会.
――――, 2015,『ユースワーク・青少年教育の歴史』東洋館出版社.
上平泰博・田中治彦・中島純, 1996,『少年団の歴史――戦前のボーイスカウト・学校少年団』萌文社.
WOSM（World Organization of the Scout Movement）, 1999, Policy on Girls and Boys, Women and Men within the Scout Movement, Durban.（=2001 ボーイスカウト日本連盟『スカウト運動における少年少女と男女に関する方針』）
矢口徹也, 2008,『女子補導団――日本のガールスカウト前史』成文堂.

How Did the Girls Join the Boy Scouts? A Gender History of the Scout Movement in Japan

YOKOYAMA Riku

Abstract

The purpose of this paper is to analyze how girls have joined the Boy Scout movement in Japan.

The Scout movement was born out of the "crisis of masculinity" in British society at the beginning of the 20th century. For the democratization of postwar Japan, the Boy and Girl Scout movements were facilitated by the GHQ side as a gender-segregated organization, as a model of non-formal education.

However, due to the influence of postwar democratic education, the view that single-sex education was unnatural had already been spread. Therefore from the 1960s to the 1980s, informal "co-education" practices were developed by the Rover Scout club in universities.

In the 1990s, the Boy Scouts membership of girls was approved due to several factors: (1) changing gender norms in Japanese society, (2) the global trend of girls joining, (3) a sense of crisis over the decline of the Scouting movement as the Scouting population began to decline after the 1980s, and (4) a growing desire for change in the face of the 21st century.

These findings suggest that in examining the gender order of education it is needed to pay attention to non-formal education outside of school.